シリーズ《生き続ける文化財》　：　『葵祭』と世界遺産『下鴨神社』

今年の葵祭は、4 年ぶりの完全復活となりました。しかも、上皇ご夫妻が 5 月 14 日に入洛され、初めて葵祭「路頭の儀」を観覧されました。雨天順延とはいえ、色鮮やかな平安行列に、京都御苑や上賀茂・下鴨神社をはじめコース沿道の人々は、動画や写真を撮影しながら久しぶりの葵祭を楽しんでいました。賀茂川を渡る出町橋では、下鴨神社に向かう牛車や馬上の勅使などが、北山を背景にゆったりと行進する姿が素敵でしたので、世界遺産『下鴨神社』周辺もあわせて見て歩きましょう。

《ご紹介》

4 年ぶりに葵祭「路頭の儀」が、一日遅れの 5 月 16 日に実施された。「路頭の儀」は、京都御所から下鴨神社を経て上賀茂神社に向かう、約 500 人･馬 36 頭･牛 4 頭･牛車 2 基の行列。今年は上皇ご夫妻が観覧されるなか、午前 10 時半に御所の建礼門前を出発し、第 65 代斎王代の松井陽菜さんが十二単姿で専用の輿「腰輿（およよ）」に乗って進んだ。

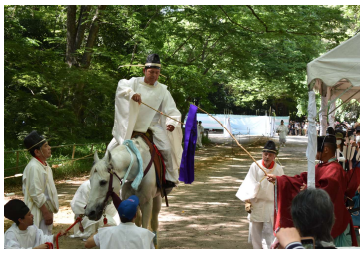
葵祭は以前「宮中の儀」「路頭の儀」「社頭の儀」で構成されたが、現在は「宮中の儀」が行われず、「路頭の儀」と「社頭の儀」が行われている。このうち「社頭の儀」は、賀茂神に対する祭文･幣物の奉納儀と饗宴儀とからなっていて、本来これらが祭の中心だった。まず勅使が祭文を奏上し、次いで宮司が祭文･幣物を神前に献じて神からの神宣･返祝詞を返し、勅使は葵桂を授かって退出する。その後饗宴儀に移り、2 頭の神馬が舞殿を 3 周廻り、東游（あずまあそび）の舞を奉納する。また糺の森では馬が疾走する走馬（そうめ）の儀も行われる。

葵祭の継承について、京都新聞は「祭りはリレー　サポーターの充実を」という見出しで、葵祭行列保存会初代会長の猪熊兼勝さんの次のような意見を紹介していた（5/10《地域プラス》）。「葵祭は文化財指定を受けていないお祭りです。理由は祭具をいろいろな方から借用していて、自前のものが少ないからです。宮内庁京都事務所を退職した方々がいろいろと協力してくれていますが、将来のことを考えると、このままではいけないと思う。葵祭

➢　路頭の儀

出町橋　ふたば葵の馬が行く

➢　走馬の儀



のサポーターの充実が、今後は大変になると思います。」

今年の路頭の儀では、行列に参加する市民ボランティアの募集を行った。これは前回の2019年に学生が思うように集まらず、急きょ市民参加を呼びかけたところ好評だったため、今年市民枠として、傘などの調度品を持ちながら歩く「白丁（はくちょう）」役を80人募集したもので、市民参加の先例ともいえる。

この機会に、下鴨神社が世界遺産「古都京都の文化財」の構成要素としてどのように登録されているか見ておこう。下鴨神社は、8世紀中頃に上賀茂神社から分立したとされ、平安京造営にあたり上賀茂神社とともに国家鎮護の社となり、11世紀初頭には現在に近い姿に整えられたという。1036年から1322年までほぼ20年毎に式年造替がくり返されたが、戦乱等により遅滞するようになり、1629年に再興され平安時代の状況が再現された。再興後は17～19世紀にかけて7回の本殿造替が行われてきたが、1863年を最後に造替は行われなくなった。近代には東西本殿の半解体修理や屋根葺替修理が行われている。国宝の東本殿・西本殿は1863年造替のものであり、上賀茂神社の本殿・権殿と同様、流造本殿の代表例である。

下鴨神社は、紀元前3世紀ごろの原生林と同じ植生を今に伝えるといわれる「糺の森」に包まれ、その境内は国の史跡だ。広さ約12ヘクタールの糺の森は貴重な都市の森林というだけでなく、ケヤキ・エノキ・ムクノキなどの広葉樹を中心に、古代・山背原野の樹林を構成していた樹種が自生し、樹齢200年を超える樹木が約600本を数えるなど学術分野からも貴重な森とされている。また境内の東側には木立の中を泉川が流れる。この川は、松ヶ崎にある井手ヶ鼻井堰で高野川から取水し、宝が池公園南側を西に流れ、下鴨地域を南に流れたあと、下鴨神社東側を南流して葵公園で高野川に戻っており、高野川の水を利用して松ヶ崎や下鴨の田畑を潤したのである。

➢　下鴨神社

➢　糺の森（大文字山から）

➢　下鴨地域の地図《国土地理院地図》

風薫る　鴨川デルタの原生林